

樋口一葉

大つごもり



大つづもり

上

井戸は車にて綱の長さ十二尋ひろ、勝手は北向きにて師走しわすの空のから風ひゆうひゆうと吹ぬきの寒さ、おお堪えがたと竈かまどの前に火なぶりの一分ぶんは一時じにのびて、割木ほどの事も大台にして叱りとばさるる婢女はしたの身つらや、はじめ受宿うけやどの老媪さまが言葉には御子様ごこころがたは男女なんによ六人、なれども常住家内うちにお出いであそばすは御総領と末お二人、

少し御新造ごしんぞは機嫌かほいろかいなれど、目色かほいろ顔色を呑みこんでしまへば大した事もなく、結句おだてに乘る質たちなれば、御前おまへの出様一つで半襟半はんゑりがけ前垂まへだれの紐ひもにも事は欠くまじ、御身代は町内第一にて、その代り吝しはき事も二とは下さがらねど、よき事には大旦那が甘い方ほうゆゑ、少しのほまちは無き事も有るまじ、厭いやに成つたら私の所ところまで端書一枚、こまかき事は入らず、他所よその口を探せとならば足は惜しまじ、何れ奉公の秘伝は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入

らぬ事も無き筈と定めて、かかる鬼の主しゆうをも持つぞか
 し、目見えの濟みて三日の後のち、七歳ななつになる嬢さま踊りの
 さらひに午後よりとある、その支度うちは朝湯にみがき上げ
 てと霜氷る暁、あたたかき寢床の中より御新造灰吹きを
 たたきて、これこれと、此詞これが目覚しの時計より胸にひ
 びきて、三言とは呼ばれもせず帯より先にたすき櫛たすきがけの
 甲斐々々かひがひしく、井戸端いづに出れば月かげ流しに残りて、肌はだへ
 を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂にて
 大きからねど、二つの手桶てをけに溢あふるほど汲くみて、十三は
 入れねば成らず、大汗あせに成りて運びけるうち、輪宝りんぼうのす

がりし曲^{ゆが}み齒の水ばき下駄、前鼻緒のゆるゆるに成りて、
 指を浮かさねば他^{たわい}愛の無きやう成^{なり}し、その下駄にて重き
 物を持ちたれば足もと覚束^{おぼつか}なくて流し元の氷にすべり、
 あれと言ふ間もなく横にころべば井戸がはにて向ふ臍^{ずね}し
 たたかに打ちて、可愛や雪はづかしき膚に紫の生々しく
 なりぬ、手桶をも其^{そこ}処に投^{なげ}出^{いだ}して一つは満足成しが一つ
 は底ぬけに成りけり、此^{これ}桶の価^{あたゑ}なにほどこ知らねど、
 身代これが為につぶれるかの様に御新造の額際に青筋お
 そろしく、朝飯^{あさはん}のお給仕より睨^{にら}まれて、その日一日物も
 仰せられず、一日おいてよりは箸^{はし}の上げ下^{おろ}しに、この家^や

の品は無代ただでは出来ぬ、主しゆうの物とて粗末しゆうに思ふたら罰ばち
 が当るぞえと明け暮れの談義、来る人毎に告げられて若
 き心には恥かしく、その後ごは物ごとに念を入れて、遂ひ
 に麁想そそうをせぬやうに成りぬ、世間に下女つかふ人も多け
 れど、山村やまむらほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常つね
 の事、三日四日に帰りしもあれば一夜居て逃にげ出いでしもあら
 ん、開かいびやく闢やく以来を尋ねたらば折る指にあの内儀かみさまが袖
 口おもはるる、思へばお峯みねは辛棒むごもの、あれに酷あたつく当
 たらば天罰たちどころに、この後ごは東京広しといへども、
 山村の下女に成る物はあるまじ、感心みごとなもの、美事みごとの心

がけと賞めるもあれば、第一容貌きりようが申分なしだと、男は直じきにこれを言ひけり。

秋より只一人の伯父が煩ひて、商売の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居ずまゐに成しよしは聞けど、むづかしき主しゆうを持つ身の給金を先きに貰へばこの身は売りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸すんの間とても時計を目当にして幾足幾町とそのしらべの苦るしさ、馳はせ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡むだにして、お暇いとまともならば弥々いよいよ病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯やせぜたいに一日

の厄介も気の毒なり、その内にはと手紙ばかりを遣りて、
 身は此処ここに心ならずも日を送りける。師走の月は世間
 一躰いったい物せわしき中を、こと更に選らみて綺羅きらをかざり、
 一昨日おととひ出そろひしと聞く某それの芝居、狂言も折から面白き
 新物しんものの、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十
 五日、珍らしく家内うち中との触れに成けり、このお供を嬉
 しがるは平常つねのこと、父母ちちははなき後のちは唯一人の大切な人が、
 病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山ゆさんに歩くべき身なら
 ず、御機嫌に違ひたらばそれまでとして遊びの代りのお
 暇を願ひしにさすがは日頃の勤めぶりもあり、一日すぎ

ての次の日、早く行きて早く帰れと、さりとは気ままの
 仰せに有難うぞんじますと言ひしは覚えで、頓やがては車の
 上に小石川こいしかははまだかまだかと鈍もどかしがりぬ。

初音町はつねちようといへば床ゆかしけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞ

かし、正直安兵衛とて神はこの頭かうべに宿り給ふべき大薬罐おほやかん
 の額かぶぎはぴかぴかとして、これを目印めじるしに田町より菊坂きくざかあ

たりへかけて、茄子大根なすびだいこの御用をもつとめける、薄元手

を折かへすなれば、折ねから直なの安やすうて嵩かさのある物より外ほか

は棹さほなき舟ふねに乗合のりあひの胡瓜きうり、苞つつに松茸まつたけの初物はつものなどは持たで、

八百安が物は何時も帳面につけた様なと笑はるれど、

愛顧ひいきは有がたきもの、曲りなりににも親子三人の口をぬら
 して、三之助とて八歳やつになるを五厘ごりん学校に通はするほど
 の義務つとめもしけれど、世の秋つらし九月の末、俄にはかに風が
 身にしむといふ朝、神田かんだに買出しの荷を我が家までかつ
 ぎ入れるとそのまま、発熱ほつねつにつづいて骨病みの出いでしやら、
 三月ごしの今日まで商ひは更なる事、段々に喰べへらし
 て天秤てんびんまで売る仕義になれば、表おもてだな店の活計くらしたちがたく、
 月五十銭の裏屋に人目の恥を厭いとふべき身ならず、又時節
 が有らばとて引越しも無惨や車に乗するは病人ばかり、
 片手に足らぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お

峯は車より下りて瓦^{そこ}処此処と尋ぬるうち、^{たこ}凧紙風船などを軒につるして、子供を集めたる駄菓子やの門^{かど}に、もし三之助の交じりてかと覗^{のぞ}けど、影も見えぬに落胆^{がっかり}して思はず往^{ゆき}来を見れば、我が居るよりは向ひのがはを瘦^{やせ}ぎすの子供が薬^{くすり}瓶^{びん}もちて行く後姿、三之助よりは丈^{たけ}も高く余り瘦せたる子と思へど、様子の似たるにつかつかつかと駆け寄りて顔をのぞけば、やあ姉^{ねえ}さん、あれ三ちゃんです有ったか、さても好い処でと伴なはれて行くに、酒やと芋やの奥深く、溝板^{どぶいた}がたがたと薄くらき裏に入^いれば、三之助は先へ駆けて、父^{とと}さん、母^{かか}さん、姉^{あね}さんを連れて帰つ

たと門口かどぐちより呼び立てぬ。

何お峯が来たかと安兵衛が起上れば、女房つまは内職の仕立物に余念なかりし手をやめて、まあまあこれは珍らしいと手を取らぬばかりに喜ばれ、見れば六畳一間けんに一間の戸棚只一つ、箆たんす笥長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかげも無く、今戸焼の四角なるを同じ形なりの箱に入れて、これがそもそもこの家いへの道具らしき物、聞けば米櫃こめびつも無きよし、さりとは悲しき成ゆき、師走の空に芝居みる人も有るをとお峯はまづ涙ぐまれて、まづまづ風の寒きに寝てお出いでなされませ、と堅焼かたやきに似し薄蒲団

を伯父の肩に着せて、さぞさぞ沢山たんとの御苦勞なさりまし
 たる、伯母様も何処どこやら瘦せが見えまする、心配のあま
 り煩ふて下さりますな、それでも日増しに快よい方で御座
 んすか、手紙で様子は聞けど見ねば気にかかりて、今日
 のお暇いとまを待ちに待つて漸やつとの事、何家うちなどはどうでも宜よ
 ござります、伯父様御全快よにならば表店おもてに出るも訳なき
 事なれば、一日も早く快よく成つて下され、伯父様に何ぞ
 と存じたれど、道は遠し心は急く、車夫くるまやの足が何時より
 遅いやうに思はれて、御好物の飴屋あめやが軒も見はぐりまし
 た、此金これは少々なれど私が小遣の残り、麴かうぢまち町の御親類

よりお客の有し時、その御隠店さま寸白すばくのお起りなされ
 てお苦しみの有しに、夜を徹してお腰をもみたれば、前
 垂でも買へとて下された、それや、これや、お家は堅うちけ
 れど他処よそよりのお方が勲負ひいきになされて、伯父さま喜んで
 下され、勤めにくくも御座んせぬ、この巾きんちやく着も半襟も
 みな頂き物、襟は質素じみなれば伯母さま懸けて下され、巾
 着は少し形なりを換へて三之助がお弁当の袋に丁度宜いや
 ら、それでも学校へは行ゆきますか、お清書が有らば姉にも
 見せてとそれからそれへ言ふ事長し。七歳ななつのとしに父てておや親
 得意場とくいばの蔵普請に、足場を昇りて中なかぬりの泥こて罎てを持ちな

がら、下なる奴やつこに物いひつけんと振向く途端、曆に黒
 ぼしの仏滅とでも言ふ日で有しか、年来馴れたる足場を
 あやまりて、落たるも落たるも下は敷石に模様がへの処
 ありて、掘おこして積みたてたる切角きりかどに頭脳したたか打
 ちつけたれば甲斐かひなし、哀れ四十二の前厄まへやくと人々後のちに恐
 ろしがりぬ、母は安兵衛が同きようだい胞なれば此処に引取られ
 て、これも二年の後のちはやり風俄かに重く成りて亡うせられ
 ば、後のちは安兵衛夫婦を親として、十八の今日まで恩はい
 ふに及ばず、姉さんと呼ばるれば三之助は弟おととのやうに
 可愛かあゆく、此処へ此処へと呼んで背を撫なで顔を覗いて、さ

ぞ父ととさんが病気で淋しく愁うれらかる、お正月も直きに来れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母かかさんに無理をいふて困らせては成りませぬと教ゆれば、困らせる処か、お峯聞いてくれ、歳は八つなれど身からだも大おほきし力もある、我が寐ねてからは稼かせぎ人てなしの費用いりめは重なる、四苦八苦見かねたやら、表の塩物やが野郎と一処しじみに、蜆しじみを買ひ出しては足の及ぶだけ担ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さまが奴やつこの孝行みとほを見徹してか、となりかくなり薬代は三が働き、お峯ほめて遣つてくれとて、父は蒲団をかぶりて涙に声をしぼりぬ。学

校は好きにも好きにも遂ひに世話をやかしたる事なく、
 朝めし喰べると馳かけ出して三時の退校ひけに道草のいたづら
 した事なく、自慢では無けれど先生さまにも褒ほめ物の子
 を、貧乏なればこそ蜩せみを担がせて、この寒空に小さな足
 に草鞋わらじをはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。
 お峯は三之助を抱きしめて、さてもさても世間に無類の
 孝行、大がらととも八歳やつは八歳、天秤肩てんびんにして痛みはせ
 ぬか、足に草鞋くひは出来ぬかや、堪忍かんにんして下され、今日けふ
 よりは私も家うちに帰りて伯父様の介抱活計くらしの助けもします
 る、知らぬ事とて今朝けさまでも釣瓶つるべの繩の氷を愁つらがつた

は勿^{もつ}躰^{たい}ない、学校ざかりの年に蛭を担がせて姉が長い着
 物きてゐらりようか、伯父さま暇^{いとま}を取つて下され、私^{わたし}
 は最早^{もはや}奉公はよしまするとて取乱して泣きぬ。三之助は
 をとなしく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじと
 うつ向きたる肩のあたり、針目あらはに衣^{きぬ}破^やれて、此^{これ}肩
 に担ぐか見る目も愁らし、安兵衛はお峯が暇を取らんと
 言ふにそれは以ての外^{ほか}、志しは嬉しけれど歸りてからが
 女の働き、そののみか御主人へは給金の前借もあり、そ
 れッ、と言ふて歸られる物では無し、初^{うい}奉公が肝腎^{かんじん}、辛
 棒がならで戻つたと思はれても成らねば、お主^{しゆう}大事に

勤めてくれ、我が病氣やまひも長くは有るまじ、少しよくば氣
 の張弓、引つづいて商ひもなる道理、ああ今半月の今歳ことし
 が過れば新年はるは好き事も来たるべし、何事も辛棒々々、
 三之助も辛棒してくれ、お峯も辛棒してくれとて涙を納
 めぬ。珍らしき客に馳走は出来ねど好物の今川焼、里芋
 の煮ころがしなど、沢山たべろよと言ふ言葉が嬉し、苦
 労はかけまじと思へど見す見す大晦日おほみそかに迫りたる家の難
 義、胸に痞つかへの病は癩しやくにあらねどそもそも床に就きた
 る時、田町の高利かしより三月しばりとて十円かりし、
 一円五拾銭は天利とて手に入りしは八円半、九月の末よ

りなればこの月はどうしても約束の期限なれど、この中に
 て何となるべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先
 より血を出して日に拾銭じっせんの稼いぎも成らず、三之助に聞か
 するとも甲斐なし、お峯が主しゆうは白金しろかねの台町だいまちに貸長屋の
 百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅じようきら美々しく、我
 れ一度お峯への用事ありて門かどまで行きしが、千両にては
 出来まじき土蔵の普請、羨うらやましき富貴と見たりし、そ
 の主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を
 聞かぬとは申されまじ、この月末に書かきかへを泣きつきて、
 をどりの一両二分を此処に払へば又三月の延期のべにはな

る、かくいはば欲に似たれど、大道餅買ふてなり三ケ日の雑煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日みそかまでに金二両、言ひにくく共この才覚たのみたきよしを言ひ出しけるに、お峯しばらく思案して、よろしう御座んす慥たしかに受合ひました、むづかしくはお給金の前借にしてなり願ひましょ、見る目と家内うちとは違ひて何処いづこにも金銭の埒らちは明きにくけれど、多くでは無しそれだけで此処の始末がつくなれば、理由わけを聞いて厭やは仰せらるまじ、それにつけても首尾そこなうては成らねば、今日は私は帰ります、又の宿下りは春永はるなが、その頃に

は皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金これを受合ける。
 金は何として越すおこ、三之助を貰ひにやるかとあれば、ほ
 んにそれで御座んす、常日つねさへあるに大晦日といふては
 私の身に隙すきはあるまじ、道の遠きに可憐かわいさうなれど三ち
 やんを頼みます、昼前のうちに必らず必らず支度はして
 置まするとて、首尾よく受合ひてお峯は帰りぬ。

下

石之助とて山村の総領息子、母の違ふに父親てておやの愛も薄

く、これを養子に出いだして家督あとは妹いもとむすめ 娘なかの中にとの相談、
 十年の昔しより耳はさに挟みて面白からず、今の世に勘当の
 ならぬこそをかしけれ、思ひのままに遊びて母が泣きを
 と父親てておやの事は忘れて、十五の春より不ふり了よう簡けんをはじめぬ、
 男振おとこにがみありて利あ発たりらしき眼まなざし、色は黒けれど好き
 様子ふようとて四隣あたりの娘どもが風説うわさも聞えけれど、唯ただ乱暴いちぢず一途
 に品川へも足は向くれど騒さわぎはその座まぎり、夜中よなかに車を
 飛ばして車くる町まの破落戸ごろがもとをたたき起し、それ酒か
 へ肴さかなと、紙入れの底をはたきて無理を徹とほすが道楽どらくなり
 けり、到底とてこれに相続は石油蔵へ火を入れるやうな物、

身代烟けふりと成りて消え残る我等何とせん、あとの兄弟も
 不憫ふびんと母親、父に讒言ざんげんの絶間なく、さりとして此放蕩れ子を
 養子にと申受うくる人この世にはあるまじ、とかくは有金の
 何ほどを分けて、若隠居の別戸籍にと内々の相談は極きま
 りたれど、本人うわの空に聞流して手に乗らず、分配金
 は一万、隠居扶持ぶち月々おこして、遊興に関を据へず、父
 上なくならば親代りの我れ、兄上と捧かまどげて竈かまどの神の松
 一本も我が託宣を聞く心ならば、いかにもいかにも別戸
 の御主人に成りて、この家やの為には働かぬが勝手、それ
 宜しくば仰せの通りに成りましよと、どうでも嫌やがら

せを言ひて困らせける。去歳こぞにくらべて長屋もふゑたり、
 所得は倍にと世間の口より我が家の様子を知りて、をか
 しやをかしや、そのやうに延ばして誰たが物にする気ぞ、
 火事は燈明皿よりも出る物ぞかし、総領と名のる火の玉
 がころがるとは知らぬか、やがて巻きあげて貴様たちに
 好き正月をさせるぞと、伊皿子いさらごあたりの貧乏人を喜ばし
 て、大晦日を当てに大呑みの場処もさだめぬ。
 それ兄様あにさまのお帰りと言へば、妹いもとども怕こわがりて腫はれ物
 のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と
 我がままをつのらして、炬燵こたつに両足、酔あひざめの水を水を

と狼藉ろうぜきはこれに止めとどをさしぬ、憎くしと思へどさすがに
 義理は愁つらき物かや、母親かげの毒舌をかくして風引か
 ぬやうに小抱こかいまき巻何くれと枕まで宛あてがひて、明日あすの支度の
 むしり田作ごまめ、人手にかけては粗末ひるになる物と聞えよがし
 の経済を枕もとに見しらせぬ。正午ひるも近づけばお峯は伯
 父への約束いとまこころもと無く、御新造ごしんぞが御機嫌を見はから
 ふに暇いとまも無ければ、僅かの手すきに頭つむりの手拭まろひを丸
 めて、このほどより願ひましたる事、折からお忙がしき
 時心なきやうなれど、今日の昼る過ぎにと先方さきへ約束の
 きびしき金とやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合

せ私の喜び、いついつまでも御恩に着まするとて手をす
 りて頼みける、最初はじめいひ出し時いでにやふやながら結局つまりは宜よ
 しと有し言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅うるさく
 いひては却りかへて如何いかがと今日までも我慢しけれど、約束は
 今日と言ふ大晦日おほみそかのひる前、忘れてか何とも仰せの無き
 心もとなさ、我れには身に迫りし大事と言ひにくきを我
 慢してかくと申ける、御新造は驚きたるやうの惘あきれ顔し
 て、それはまあ何の事やら、なるほどお前が伯父さんの
 病気、つづいて借金の話しも聞きましたが、今が今私わたしの宅うち
 から立換へようとは言はなかつた筈、それはお前が何ぞ

の聞違へ、私は毛頭すこしも覚えの無き事と、これがこの人の
 十八番とはてもさても情なし。

花紅葉はなもみぢうるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟ゑりをそ
 ろへて褻つまを重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪
 魔ものの兄が見る目うるさし、早く出てゆけ疾とく去いねと
 思ふ思ひは口にこそ出いださね、もち前の疖かんし癩やくしたに堪え
 がたく、智識の坊さまが目めに御覧じたらば、炎につつま
 れて身は黒烟くろけふりに心は狂乱の折ふし、言ふ事もいふ事、
 金は敵葉てきやくぞかし、現在うけ合ひしは我れに覚えあれど何
 のそれを厭いとふ事かは、大方お前が聞きちがへと立たてきりて、

烟草輪たばこにふき私は知らぬと済しけり。

ゑゑ大金でもある事か、金なら二円、しかも口づから承知して置きながら十日とたたぬに耄もうろくはなさるまじ、あれあの懸すずりけ硯すずりの引出しにも、これは手つかずの分ぶんと一ト束、十か二十か悉みな皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔ゑがほ、三之助に雑煮のはしも取らさると言はれしを思ふにも、どうでも欲しきはあの金ぞ、恨めしきは御新造とお峯は口惜くちをしさに物も言はれず、常々をとなしき身は理屈すべづめにやり込すべる術もなく、すごすごと勝手に立てば正午の号砲どんの音たかく、かかる折ふし殊更

胸にひびくものなり。

お母^{はは}さまに直^{すぐ}さまお出下さるやう、今朝^{けさ}よりのお苦るし

みに、潮時は午後、初^{ういざん}産なれば旦那とり止めなくお騒ぎ

なされて、お老人^{としより}なき家なれば混雑お話しにならず、今

が今お出でをとて、生^{しょうし}死の分^{わけ}目といふ初産に、西応寺の

娘がもとより迎ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬ

物なり、家のうちには金もあり、放^の蕩^らどのが寐^ねてはいる、

心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、

車には乗りけれど、かかる時気樂の良^{おつと}人が心根にくく、

今日あたり沖釣りでも無き物をと、太^{たい}公^{こう}望^{ぼう}がはり合ひな

き人をつくづくと恨みて御新造いでられぬ。

行ちがへに三之助、此処と聞きたる白銀台町、相違な

く尋ねあてて、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひ

やりて、勝手口より怕々のぞけば、誰れぞ来しかと竈

の前に泣き伏したるお峯が、涙をかくして見出せばこの

子、おお宜く来たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉さま

這入つても叱かられはしませぬか、約束の物は貰つて行

かれますか、旦那や御新造に宜くお礼を申て来いと父さ

んが言ひましたと、子細を知らねば喜び顔つらや、まづ

まづ待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を

見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に余念なく、小僧どのはまだお使ひより帰らず、お針は二階にてしかも聾なれば子細なし、若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中まつただなか、拝みまする神さま仏さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰ばちをお当てなさらば私わたし一人、遣つかふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免ゆるしなさりませ、勿躰もつたいなけれどこの金ぬすませて下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後のちは夢とも現うつつとも知らず、三之助に渡して歸したる始終を、見し人なしと思へるは愚

かや。

.....

その日も暮れ近く旦那つりより恵比須ゑびすがほして帰らるれば、御新造も続いて、安産の喜びに送りの車夫ものにまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞ひまする、明日あすは早くに妹いもと共ともの誰たれなりとも、一人は必らず手伝はすると言ふて下され、さてさて御苦勞と蠟燭代ろうそくだいなどを遣やりて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身からだを片身かりたき物、お峯小松菜はゆでて置いたか、数の子は洗つたか、大旦那はお歸りに成つたか、若旦那はと、これは小声に、まだと聞い

て額しほに皺しほを寄せぬ。

石之助その夜よはをとなく、新年はるは明日あすよりの三ケ日なりとも、我が家にて祝いわぶべき筈はかまながら御存ごぞんじの締しめりなし、堅かたくるしき袴はかまづれに挨拶あいさつも面倒めんどう、意見いけんも実は聞ききたり、親類しんるいの顔かほに美しくしきも無なければ見みたしと思おもふ念ねんもなく、裏屋うらやの友達ともだちがもとに今宵こんせう約束やくそくも御座ござれば、一先まっお暇いとまとして何いづれ春永はるながに頂戴ちやうたいの数数かずかずは願ねがひまする、折せからお目出度めでたき矢先やせん、お歳暮としごもりには何なにほど下くださりますかと、朝あさより寝込ねこみみて父ちちの帰かえりを待まちしは此これ金かねなり、子こは三界さんがいの首くび械かせといへど、まこと放蕩のらを子こに持もつ親おやばかり不幸ふこうなる

は無し、切られぬ縁の血筋といへば有るほどの悪戯いたづらを尽
 して瓦解がかいの暁に落こむはこの淵ふち、知らぬと言ひても世間
 のゆるさねば、家の名をしく我が顔はづかしきに惜しき
 倉庫くらをも開くぞかし、それを見込みて石之助、今宵を期
 限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を為したるもあれ
 ば、花見のむしろに狂風一陣、破落戸ごろつき仲間せんかたに遣る物を遣
 らねばこの納まりむづかしく、我れは詮方せんかたなけれどお名
 前に申わけなしなどと、つまりは此金これの欲しと聞えぬ。
 母は大方かかる事と今朝けさよりの懸念うたがひなく、幾金いくら
 とねだるか、ぬるき旦那どのの処置はがゆしと思へど、

我れも口にては勝がたき石之助の弁に、お峯を泣かせし
 今朝とは変りて父が顔色いかにとばかり、折々見やる尻
 目おそろし、父は静かに金庫の間へ立ちしが頓やがて五十円
 束一つ持ち来て、これは貴様に遣るではなし、まだ縁づ
 かぬ妹どもが不憫ふびん、姉が良人おつとの顔にもかかる、この山村
 は代々堅気一方に正直律義を真向まっこうにして、悪い風説うわさを立
 てられた事も無き筈を、天魔の生れがはりか貴様といふ
 悪者わるの出来て、無き余りの無分別に人の懐ふところでも覗ねらうや
 うにならば、恥は我が一代にとどまらず、重しといふと
 も身代は二の次、親兄弟に恥を見するな、貴様にいふと

も甲斐かひは無けれど尋常なみなみならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に悪評もうけず、我が代りの年礼に少しの労をも助くる筈を、六十に近き親に泣きを見するは罰あたりで無きか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故なぜこれが分りをらぬ、さあ行け、帰れ、何処へでも帰れ、この家に恥は見するなとて父は奥深く這入りて、金は石之助が懐中ふところに入りぬ。

.....

お母様御機嫌よう好い新年をお迎ひなされませ、左様ならば参りますと、暇乞わざとうやうやしく、お峯下駄

を直せ、お玄関からお帰りでは無いお出かけだぞと
 凶分々々しく大手を振りて、行先は何処いづこ、父が涕なみだは一夜
 の騒ぎに夢とやならん、持つまじきは放蕩のら息子、持つま
 じきは放蕩のらを仕立したつる継母ままははぞかし。塩花こそふらね跡は一
 まづ掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれ
 ど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、どうすれば
 あのやうに凶太くなられるか、あの子を生かんだ母さんの
 顔が見たい、と御新造例に依つて毒舌をみがきぬ。お峯
 はこの出来事も何として耳いに入るべき、犯したる罪の恐
 ろしさに、我れか、人か、先刻さつきの仕業はと今更夢路を辿たど

りて、おもへばこの事あらはれずして済むべきや、万が中なかなる一枚とても数ふれば目の前なるを、願ひの高に相応の員いんず数手近の処になく成しとあらば、我れにしても疑ひは何処いづこに向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ抜けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかかる、我が罪は覚悟の上なれど物がたき伯父様にまで濡れ衣ぎぬを着せて、干ほされぬは貧乏のならひ、かかる事もする物と人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよかる、伯父様に疵きずのつかぬやう、我身が頓死とんしする法は無きかと目は御新造が起居たちゐにしたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

おほかんじよう

大勘定とてこの夜あるほどの金をまとめて封印の事

あり、御新造それそれと思ひ出して、懸け硯に先程、屋根やの太郎に貸付のもどり彼金あれが二十御座りました、お筆お峯、かけ硯を此処へと奥の間より呼ばれて、最早この時わが命は無き物、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのままに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同腹ひとつで無きだけを何処までも陳べて、聞かれずば甲斐なしその場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思し

めすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠処としよの羊なり。

.....

お峯が引出したるは唯二枚、残りは十八あるべき筈を、
 いかにしけん束のまま見えずとて底をかへして振へども
 甲斐なし、怪しきは落散し紙切れにいつ認したためしか受取
 一通。

(引出しの分も拝借致し候

石之助)

さては放蕩のらかと人々顔を見合せてお峯が詮議は無かり
 き、孝の余徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いや

いや知りて序ついでに冠かぶりし罪つみかも知れず、さらば石之助は
お峯たかねが守り本尊ほんぞんなるべし、後のちの事しりたや。

日本文学電子図書館

にごりえ・たけくらべ

著 者：樋口一葉

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

日本文学電子図書館